

1 情勢報告

J A土佐くろしおハウスシントウ部会の現地検討会が開催されました



現地検討会の様子

12月6日に、J A土佐くろしおハウスシントウ部会の現地検討会が開催されました。ウイルス病が発生し現地検討会を見合わせてから1年半ぶりの開催となり、大勢の方が参加されました。

検討会では、初めに営農指導員からほ場の栽培管理の説明があり、農業振興センターからは、現地ほ場で行っている品種や仕立て方法、I P M技術の試験の途中経過を報告しました。

樹や天敵・病虫害の状態を見ながら活発な意見交換を行う生産者の様子に、栽培技術向上への意欲の高さが窺えました。

今後も振興センターは、J Aと協力し生産者の栽培技術向上のための支援を行っていきます。

津野山地区のユズが出荷されました



ユズ出荷風景

J A津野山ユズ部会の平成24年度の出荷が11月12日から始まり11月28日まで計7回で終了しました。総出荷量は、18.6tで、前年比179%でした。

植え付け5年目となるユズの出荷も去年度から始まり今後も出荷量は増加すると思われます。

今後も振興センターは、栽培基準に基づいたJ A馬路村との契約栽培を念頭に置き、J A津野山と協力してユズの産地化を進めていきます。

管内の農産物直販所における農薬適正使用と店舗におけるリスク管理の仕組み構築の打ち合わせ会を開催しました。



事前に行った関係機関の打合せ

須崎農業振興センター管内には（アンテナショップも含めて）17の農産物直販所があり、中山間地域の農家の収入源として、また消費者には新鮮な農産物を手続きできる場所として期待されています。

そこで、農業振興センターとJ A土佐くろしお、J A津野山は、上記のうち10店舗について、直販所出荷者の農薬の適正使用と店舗でのリスク管理の仕組み作りを推進することとし、12月7日に第一回目の作業グループ会を開催しました。

今後は、農家自身の農薬使用、直販所でのチェック体制、関係機関による指導等、各主体・段階での農薬適正使用を推進していきます。

1 情勢報告

梶原町内の農産物直販所（雲の上の市場、マルシェゆすはら町の駅）出荷者の勉強会を開催しました。



出荷者の勉強会

梶原町内の2つの農産物直販所が12月11日に、出荷の促進と商品の安全安心の推進を目的とした勉強会を開催しました。

勉強会には34人の出荷者が参加し、「梶原地域での有望品目」、「出荷者の心得」、「出荷品の事故の事例に学ぶ安全安心」などについて農協、振興センター職員の説明に熱心に耳を傾けました。

2つの直販所では、将来的に農薬使用履歴の記帳とチェック体制の確立を目指しており、今回の勉強会を皮切りに、今後も勉強会を開催する計画です。振興センターでは、管内の農産物直販所における農薬適正使用と店舗におけるリスク管理の仕組み構築を推進していきます。

JA土佐くろしおキュウリ部会の現地検討会が開催されました(12月4日・5日・14日)



JA土佐くろしおキュウリ部会の現地検討会が、12月4日、5日、14日に須崎地区の5ほ場で開催され、58名の参加がありました。

検討会では、担当営農指導員から現地検討会の会場となっているほ場の栽培管理状況等について説明があり、その後、種苗会社や営農指導員、振興センターよりこれから迎える厳寒期の管理について説明を行いました。

本年は、朝晩の冷え込みが比較的早く訪れたことから、今後の管理も非常に重要であることが再認識されました。

振興センターでは今後とも関係機関と連携し、現地検討会を継続的に開催し、篤農技術の移転や栽培指導により、安定生産を支援していきます。

JA土佐くろしおミョウガ部会の現地検討会（11月28日、12月11日・12日）



JA土佐くろしおミョウガ部会の現地検討会が、11月28日、12月11日・12日に須崎地区の3ほ場で開催され、65名の参加がありました。

現地検討会では、まずJA営農指導員からほ場の耕種概要、栽培管理の状況について説明が行われました。

その後、振興センターから、現在行われているミョウガの管理について、環境制御の観点からみた改善方策の提案を行いました。

生産者も、ほ場のミョウガの状態についてそれぞれ意見を出し合い、栽培管理について議論が行われ活発な検討会となりました。

振興センターでは、現地ほ場の調査や、試験研究機関との情報交換を通して、より適した栽培環境を探ることで安定生産、収量増技術の組み立てを目指します。

1 情勢報告

JA土佐くろしおピーマン部会の現地検討会



真剣にピーマンと向き合う参加者

JA土佐くろしおピーマン部会の現地検討会が、12月12日に須崎地区の3圃場で開催され、11名の参加がありました。

今回の現地検討会は、3戸の生産者の圃場を順に巡り、それぞれの栽培管理、品種の違い、害虫・天敵の発生状況などを見比べる形式としました。

振興センターからは、仕立て方法比較試験の途中経過や、天敵導入圃場での調査データについて、情報提供を行いました。現地圃場では土着天敵がうまく定着しており、放飼時期や方法について生産者から質問も出ました。

今後は、天敵の減少しやすい厳寒期を乗り越えるべく、関係機関と協力して観察、技術の組み立てを行っていきます。

JA土佐くろしお花き部会 県内視察研修



農大の圃場



農技センターの試験圃場

JA土佐くろしお花き部会では11月29日に、部会員17名が農業大学校と農業技術センターの2か所を訪問し、それぞれ花き栽培圃場の見学、試験内容・結果の聞き取りを行いました。

農業大学校ではさまざまな花が栽培されており、産地に無い品目についての質問が出されました。

農業技術センターでは、当産地にも生産者の多いユリの夜冷栽培試験や、最近注目されているダリアの栽培状況について、生産者の興味が集まりました。

このような視察研修は久しぶりの開催だったこともあり、生産者からは「自分の生産品目以外の話が聞けてよかった」「今度は県内の他地域の産地を見に行きたい」など前向きな意見が聞かれました。

振興センターでは、目慣らし会や検討会などの機会を使って、県内他産地の状況や、新しい品種動向などの情報を伝えていきます。

中土佐町の生産者が集落営農の先進事例調査に行きました



「JAおちいまばり さいさいきて屋」にて集合写真

12月4、5日に愛媛県今治市「JAおちいまばり さいさいきて屋」、砥部町「農事組合法人 ななおれ梅組合」、内子町「内子フレッシュパーク からり」に中土佐町3地区から生産者5人、関係機関5人で6次産業化を視野に入れての視察を行いました。

「さいさいきて屋」では、集荷や後継者育成システム、また安全安心を担保する工夫が見られました。「ななおれ梅組合」は、梅の出荷で市場に最低価格を示すと同時に出荷量調整、加工（梅干し）に特徴が見られました。「からり」は、出品物の品質にこだわり、将来を見据え加工品の取組み、栽培履歴の公表、クレーム対応が整備されていました。「さいさいきて屋」代表の「失敗はない。成功するまでやるから。」の言葉は生産者に刺激となったようです。

振興センターでは、今後も関係機関と連携し集落営農を進めていきます。

